

# Y 2008 No.42



これは世につたえておきたい  
かたっておきたい  
わが胸の底から真実のおもい  
人生幾山河のめぐりあい  
あの日の風やひかり そして空のひとひら  
哀歓のかがり火に生きた幾年月の路  
「自分史図書館」は その証言館です。

## 新刊紹介

○「気づき」の力  
生き方を変え  
国を変える

柳田 邦男



食品偽装、医療崩壊、教育危機、便利さやお金を追求した結果一著者は壊れる日本人への警告をここに発している。

この著のなかで、私がもっとも注目したのは、「緩やかな“戦災”“地方の荒廃”」を説く一節であった。ここに

引用するので地方行政に関わる方々にぜひ一読をお願いしたい。

一平成の市町村合併と並行して、小・中学校の統廃合が加速している。かつて全国の中山間地域に点在していた小学校の分校が姿を消して久しいが、ここへ来て何十年も存立していた地域の小・中学校までが、児童生徒数の減少と自治体の財政難を理由に、次々に廃校を余儀なくされ、山間に住む子どもたちは、遠方の学校にスクールバスで通わなければならなくなっている。これでは若い世代が中山間地域に居つくわけがない。学校統廃合が中山間地域の崩壊をさらに加速させるのは火見るより明らかだ。

このような論説にどう対応するか。少々、手おくれの感なきにしもあらずであるが、中山間地に暮らすわれらには新たな活路を見いださなければなるまい。皆さん、如何でしょう。

## 新刊紹介

○江南三大名楼とその周辺  
漢詩紀行

牛島 景資



去る6月24日、八女文化連盟事務局長の牛島さんが、秋に企画されている文化講演の依頼に見えた。そこで私宅の山舎に招じたところ、壁に掲げている色紙額にすぐに視線がいき、「王昌齡の七言絶句の一節ですね」と朗々と読みあげられたのである。『一片

氷心在玉壺』の七文字を「寒雨江に連なりて、夜呉に入る 平明客を送れば楚山孤なり、洛陽の親友もし相ひ問はば一片の氷心、玉壺に在りと」と読みあげられ解説も述べられて、私は即座に感服。この色紙は、作家梅崎春生桜島文学碑建立記念に際し、梅崎さんの遺筆の色紙を戴いたものであった。ここに招じて、この色紙に着目してくださったのは牛島さんが始めてであった。お尋ねしたところ、吟詠をなされているよし。単に朗詠のみでは真にせまらずと、漢詩を味わうには、その歴史的背景、自然環境、作者の心境をよく知ることが肝要ではないかと、中国へ再三の渡航、「江南漢詩紀行」二冊目を上梓、「自分史図書館」にもご寄贈いただく。

牛島さんは、あとがきに、「あの広大な洞庭湖のほとりに立った時、杜甫は、「呉楚東南に圻け、乾坤日夜浮かぶ」と思い切った表現で、その感動を詠っていますが私のようなものでも、それがわかるような雄大な景色です」と述べられ、悠久の歴史、風光に感動、それを少しでも伝えられたらと記されている。座右に求めて、おりにひもときたい好著である。

## 受贈図書紹介 ③

順次紹介していますが受贈日より多少遅れます。  
あしからずご了承下さい。

大正・昭和・平成の人生 …… 五十嵐 進 埼玉 県  
我が人生の歩み …… 辻村 敏郎 町 田 市  
春はいつ来る …… 三輪百合子 大 分 市  
中学校ってどんなもの …… 村上 テル 神 奈 川 県

この道泣いて笑って …… 藍原 益子 藤 野 町  
妄想スケッチ …… 久保田カオル  
旅と夢と散策と …… 坂内 昇 久 喜 市  
こころの摘み草 …… 稗田チヅ子  
幻炎 …… 島田 真祐  
汽笛の記憶 …… 鳥栖市誌編纂委員会

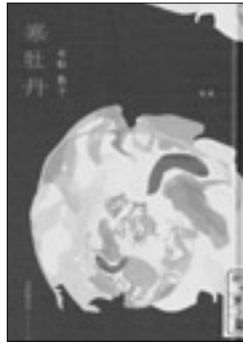


○機関車に片思い

宇都宮照信

鉄道ファンにとっては何よりの本。機関車のなつかしい貌が満載の本である。“汽車は～今は山中、今は浜、今は鉄橋渡るぞと、思ふ間もなくトンネルの闇を通過して広野原……”あの唱歌の風景がよみがえってくる機関車のアルバム。

著者は、あとがきに、汽車とつき合って50年、機関士として乗ることはできなかったが、小さい頃から汽車を見て育ち、食堂車の乗務員として働き、今は九州鉄道記念館に勤めているとのこと。大分出身、同郷の侃侃房田島安江さんのお世話で出版できたいきさつも述べられている。



○寒牡丹

永松典子

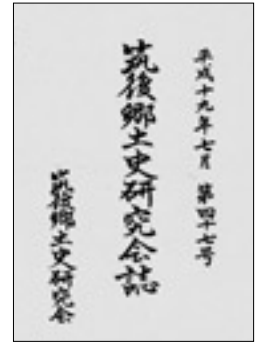
若き日の秘めし想いも年古れば街屋根上に光る遠火花  
体より旅の余韻の消えやらず主婦に戻れぬ一日二日  
秋晴れの九重高原に野の花を摘みつつ行けり夫亡き吾は  
事もなく終われし一日野良猫に声などかけて雨戸を閉ざす  
ふる里に集う五十年目のクラス会六十路の顔にのぞく童顔



○詩 朱夏

杉 眞理子

ジジジッと 激しい一声をあげて  
ベランダの固いコンクリート床に飛び込んでくる  
腹を上に向けて足をわずかに蠢かせ  
見ているうちに動かなくなる  
その形は討ち死にである  
頑固な形相だ 七年も地中で暮らして  
鳴くために木の幹を這いのぼる地上に出てくるときすでに  
予感された死である  
鳴くことが生きること  
生の衝動のまま死に至る  
意味など初めから粉碎されている  
その姿やあっぱれと 濡らした指から  
したたる水を 顔のあたりへ一滴たらしてやるのだがうれしくもない  
末期の水に違いない  
この夏ひとりの男が逝った  
「一期は夢ぞ ただ狂へ」と歌いながら



○筑後郷土史研究会誌

第47号

この号で特記すべきは、江里口充さんが、「市民大学・八媛ふるさと一燈大学の4年間」の記録をまとめられていて、筑後八女一円の生涯学習記録として貴重な資料として意義深いものがある。平成15年5月開講。そして平成18年3月、4年次で閉講のやむなきに至ったことなどの反省点も述べられているが、各市町村社会教育に携わる方々には是非一読をすすめたい。

迎えた講師は当代一流、著名な方々32名。江戸学でひとしきり活躍であった杉浦日向子さんを迎えた日もあったが、今は亡き人。一大事業を始めながら4年を限りに幕をおろさざるを得なかったのは何故か？

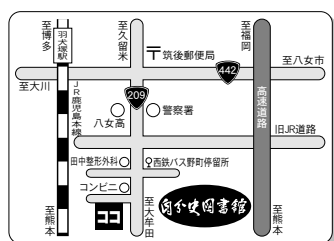
編集掌記

▼俳人福留風門さんの誘いで、6月17、18、19日二泊三日で、愛知県明治村から中山道一帯

の文化施設を回遊してきた。明治村は、初代村長徳川夢声、二代目森繁久彌、三代目現村長は小沢昭一さん。村長室に入ったら歴代村長肖像写真、現村長は等身大の写真に、小沢さんの著書が並べられていた。年に一度ぐらいの出勤だそうで、そのときは大歓迎のよし▼木曾馬籠に入って、鳥崎藤村記念館を見た。ここでもっとも感服させられたのは、郷土の文豪を顕彰しようと若者たちが多忙な農作業のかたわら、製材、石の切りだし、耕地作業、ほぼ手づくりによって、まず藤村堂を完成させたといういきさつであった。戦後、文学館の

自分史図書館

入館無料  
開館 午前9時～午後5時  
閲覧希望の方は予め電話でご確認下さい。  
貸し出しはしていません。



〒833-0032 筑後市野町423-8 TEL・FAX 0942-53-8122  
西鉄バス野町停留所より徒歩5分  
インターネットでもご覧になれます。http://www.jibunshitosyokan

草わけ的存在として評価されるといっただけの品格を感じさせる。▼筑後市の郷土史研究会の講座に招かれ、6月27日、話に行く。ここで江里口さんが、「八媛ふるさと一燈大学」4年間の記録を大切にまとめられていることを知って嬉しく思った。(自分史図書館長 椎袋猛)